中国少数民族地域における西洋伝道会の宣教活動についての考察

徐　　亦猛

Missionary Activities of Minority Ethnic Groups in China

Yimeng XU

福岡女学院大学紀要
国際キャリア学部編抜刷　Vol. 8, 2022

中国少数民族地域における西洋伝道会の宣教活動についての考察[1]

徐　亦猛

Missionary Activities of Minority Ethnic Groups in China

Yimeng XU

はじめに

中国は、約56の民族からなる多民族国家である。中国の長い歴史をふりかえると、少数民族問題は常に歴代王朝にとって社会を安定させるための最重要問題であり、1949年の「中華人民共和国」成立以後も、政府が解決すべき最優先課題として位置づけられてきた。現代一部の中国少数民族においてはキリスト教の広がりが非常に著しく、この現象は中国少数民族の宗教研究において、きわめて興味深い課題である。従来、それぞれの文化、伝統が異なる中国の少数民族の宗教的基盤は伝統的な原始宗教であった。しかし、一部の中国の少数民族の間に非常に浸透しているのは、少数民族の伝統的な原始宗教や絶大的な影響力をもつ儒教、道教、仏教などといった漢民族の伝統的な民間信仰ではなく、西洋文化の根源であるキリスト教である。キリスト教が外来の宗教として、中国少数民族の伝統的な原始宗教、道徳規範、既に形成されていたライフスタイル、及び少数民族の本来の文化と社会的構造に深刻な影響と衝撃を与えたのは、間違いない。中国西南部に位置する雲南省は、25の少数民族が居住する中国で最も複雑な地域である。さらに、雲南省における諸少数民族は祖先を神のように信仰して崇拝し、この信仰と崇拝が民族の生活方法を支配し、自分自身の行為を規範するために、独特な宗教文化を形成した。雲南省本土の少数民族は長期的かつ閉鎖的な環境の中で暮らしているので、伝統的な原始宗教が堅持されてきた。漢民族の支配者はこの地の少数民族に様々な同化政策を行ってきたが、古来より少数民族の子弟に儒教と

[1] 本研究は2020年度科研費（研究課題番号：JP20K01233）により実施されたものである。

道教の思想と信仰儀式を押し付けたことが根幹である。しかしこの地では、少数民族の伝統的な原始宗教の社会的基盤が非常に強かったため、漢民族の宗教と文化は終始諸少数民族からの頑強な抵抗を受け、今日まで普及してこなかった[2]。

こうした歴史的と社会的背景のもとに、本論文は、雲南省の少数民族地域における西洋伝道会の活動を考察する場合、ミッション団体・宣教師から直接影響を受けた事実として非常に重要である。キリスト教側（ミッション団体）の文脈から少数民族における伝道活動を検討する余地はなお残されている。特に雲南省の少数民族との深い関係がありながら、その実態が解明しきれていないのが英国循道公会（the United Methodist Church）と中国内地会（China Inland Mission）である。英国循道公会及び中国内地会における中国少数民族への伝道活動はまだ十分に発掘されておらず、英国循道公会及び中国内地会が少数民族布教との接点という視点から改めて史料を読み直す必要が出てきている。

以上のような背景を踏まえ、本論文は、英国循道公会所属宣教師ポラード（Samuel Pollard 柏格理）及び中国内地会所属宣教師ポーデス（Gladstone Charles Fletcher Porteous 張爾昌）を取り上げ、彼らの宣教活動を考察し、ミッション団体と少数民族の間においてこれまで解明されてこなかった布教関係及び事象を明らかにする。

一、英国循道公会宣教師ポラードの改心

ポラードは1864年にイギリス西南端コーンウォール郡キャメルフォードの敬虔なクリスチャン家庭に生まれた[3]。彼の祖父は巡回牧師であり、ジョン・ウェスレーの伝道に協力し、後にコーンウォール地域のメソジスト教会の指導者となった[4]。ポラードの父は祖父の篤いキリスト教信仰による薫陶を受け、同じくメソジスト教会の巡回牧師となった。1875年、父より洗礼を受けたポラードは自分の日記に将来祖父と父のように立派な牧師になると書き記した。

---

[2] 徐亦猛「中国の少数民族におけるキリスト教受容に関する研究―雲南省禄勧県イ族（彝族）の村落を中心に」『神学研究』第64号、関西学院大学神学部、2017年３月、151-152頁参照。

[3] W.A.Grist, *Samuel Pollard Pioneer Missionary in China*, United Methodist Publishing House, p.3.

[4] Ibid., p.2.

しかし、当時英国国教会以外の聖職者の仕事は非常に清貧であり、生活費の不足部分を補填するため、ポラードの父は時に教会の仕事を終えて、縄製造という職人の仕事に携わった[5]。夜も昼も働く両親の苦労を見て、次第に彼は牧師になろうという願望に不安を抱くようになり、結局、両親や兄弟に裕福な生活をさせるため、牧師の職業を選ばず、公務員になるという道に進むことを決心した。

活気に満ちたポラードは学校の人気者であり、さらに彼は生まれつき賢く、学校で優れた勉強の才能によって、校長からの称賛を博した。学校卒業後、彼はイギリスの国家公務員の試験に参加し、見事に全国で３番の優秀な成績を収め、公務員の身分を手に入れた。その後、彼は得意満面で故郷を離れ、大都会ロンドンの郵便局の会計として赴任した。毎日忙しい郵便局で金銭の計算に追われ、次第に教会のこと、神のことは頭の隅に置かれ、世俗のことばかり注目するようになった。金銭、富、優雅な生活などが、ポラードの追い求める人生目標となった[6]。

ある休日、ポラードは書店でデイヴィッド・リヴィングストン[7]によるアフリカでの宣教活動の伝記と出会い、非常に感銘を受けた。今まで自分は牧師になる願望を捨て、世俗の名利ばかり求めていることを深く反省したため、もう一度神に振り返り、リヴィングストンのように世界中の福音の未開地へ宣教に行く決心をした。

1885年ポラードは偶然に海外宣教会議の講演会に出席した。ちょうど講演会のゲストスピカ―は中国内地会（China Inland Mission）の創立者 J.H.テーラー[8]であった[9]。講演会において、テーラーから語られた中国での宣教の見聞及び中国宣教の重要さが深くポラードの心に刺激をあたえた。講演会の最後に、ポラードは立ち上がって、ステージに上り、テーラーと聴衆に向かって、中国へ宣教に行く決心を告白した[10]。

---

[5] Ibid., p.1.

[6] 阿信『用生命愛中国―柏格理』、大象出版社、2014年、３-５頁参照。

[7] デイヴィッド・リヴィングストン（David Livingstone、1813年３月19日 － 1873年５月１日）は、スコットランドの探検家、宣教師、医師。ヨーロッパ人で初めて、当時「暗黒大陸」と呼ばれていたアフリカ大陸を横断した。また、現地の状況を詳細に報告し、アフリカでの奴隷解放へ向けて尽力した人物でもある。

[8] ジェームズ・ハドソン・テーラー（戴德生、James Hudson Taylor、1832年５月21日 － 1905年６月３日）は、イギリスの宣教師、チャイナ・インランド・ミッション、中国奥地宣教団の創立者である。テーラーは中国で51年を過ごした。

[9] Grist, ibid., p.9.

二、ポラードにおけるミオウ族とイ族へのキリスト教伝道

19世紀後半、プロテスタント宣教師は相次ぎ雲南省に入り、大都市部において宣教活動を展開したが、著しい効果が上がらなかった。中小規模の町に宣教活動を転じても、漢文化の強い影響で、キリスト教徒の増加は非常に緩やかであった。しかし19世紀末、滇（雲南の別称）西北部の大理、東北部の昭通などで、英国循道公会、中国内地会の宣教活動が活発に行われるに従い、ミオウ族、イ族の信徒数は急速に成長し、漢民族の信徒数を超えるに至った。1881年中国内地会の宣教師クラーク（George Clarke 克拉克）は上海からいったんビルマを経由して大理に入り、最初のプロテスタント教会を建てた。その二年後、同じ中国内地会のイギリス人宣教師サリバン（Samuel Thomas Thorne 索理仁）が上海から四川の宜賓を経て雲南に入り、雲南の東北部の昭通、東川で宣教活動を行い、教会を設立した。ポラードが所属する英国循道公会の中国での宣教において、ほかの西洋宣教ミッションより少し遅れていた。そんな中、1887年、ポラードは英国循道公会の中国地域宣教師として、派遣を受け、中国の上海に入り、その後、中国の安徽省安慶で語学研究のため、しばらく滞在した。ポラードは内地会の宣教師の影響を受け、現地の文化と言葉を重視した。安慶に設けられた内地会の語学学校において、彼は一生懸命に中国語の会話と『論語』などの中国の伝統古典を勉強した結果、６ヶ月後には現地の中国人に向けて、中国語の説教もできるようになっていた。翌年、彼は８ヶ月の語学研修を終えた後、四川を経て、旅の危険を乗り越え、ようやく雲南省の昭通に辿り着き、宣教活動が始まった。昭通は昆明市の東北部に位置し、イ族土司[11]の支配に置かれた非常に交通の不便な辺鄙な山岳地域である。大半の町の住民はイ族であるため、ポラードは主にイ族に向け、熱心に宣教活動を行ったが、大きな教勢の進展は現われなかった。その後まもなく、彼は、昆明に赴いたが、そこでも宣教があまりに不調であったため、やむをえず昆明を撤退し、1892年、再び昭通に戻っていた。

その年の冬、昭通で大飢饉に覆われ、ポラードは自分の家を現地で唯一の難民

---

[10] 阿信、前掲書、６頁。

[11] 土司制度は元、明、清代にわたって各王朝より辺境に居住する悲観漢民族の首長（族長）たちに異なる位の官職を与えて間接統治を行ったシステムのことをいう。厳密にいえば、土司は武職であり、土官が文職であるが、一般に総じて土司と通称する。

救済慈善機構としてイ族の住民に提供した。飢饉中、彼は食物をもって、昭通の街を歩き回って、全力で貧しいイ族の救済活動に取り込んだ。翌年1893年、ポラードの献身的な働きと導きによって、二人のイ族の改宗者が現れ、彼らのために昭通で最初の英国循道会の教会が開設された。同年、ポラードはキリスト教宣教以外に、教会付属英国教育式の塾「中西学堂」を開設し、天文、地理、英語、数学を現地の一般のイ族民衆に教授した。しかし、イ族は非常に階級制の厳しい部族であるゆえ、支配階級の土司が改宗しない限り、多数のイ族改宗者を獲得することは困難であった。初期伝道の経験浅いポラードは、その点に気がつかず、精一杯の宣教活動を一般のイ族民衆に対して行ったが、土司階級と接触しなかったゆえ、昭通での宣教活動はまったく振るわなかった。厳しい階級制度と根深い原始信仰の前に、ポラードは無力を感じた。あまりにも宣教成果があがらない状況において、ポラードは非常に苦悶し、一旦帰国を決意したが、祈りを通して、宣教活動の転機を待ち続けた。1900年、中国北方における義和団の乱を受け、ポラードは家族を連れて、香港に避難し、昭通に戻ったのは1901年11月のことであった。

1903年中国内地会のイギリス人宣教師アデーム（J.R.Adaeme、党居仁）は、貴州安順のミオウ族地区での伝道活動に成功し、現地及び周辺のミオウ族から「ミオウ族の王」と奉じられた。そのため、安順から遠く離れた雲南・貴州境界地域の多くのミオウ族も安順へ赴き、キリスト教に改宗した。アデームは内地会上海総部に自分をミオウ族宣教に専念させてもらえるように手紙を送ったが、J.H.テーラーは、ミオウ族宣教と同時に漢民族宣教も同じように進めることを求めた。テーラーは、内地会全体の最高指導者として、漢民族の官吏や郷紳たちが、ミオウ族への伝道活動を、宣教師がミオウ族に接近しミオウ族の反乱を煽っていると判断されることを心配したからであった。そのため、少数民族宣教に熱心であったアデームは、先行したミオウ族宣教に十分に専念できなかった。さらに、雲南のミオウ族が安順に行く道程の遠さに鑑みて、アデームはミオウ族の民衆が昭通に赴き、ポラード牧師を訪ねるよう紹介した。

1904年７月アデームの手紙を携えた４人のミオウ族が昭通にポラードを訪ねた。この４人の到来は、ミオウ族のキリスト教歴史上に新しい一ページを書き添えたと同時に、ポラードの宣教活動の転換点ともなった。ポラードは彼らを暖かく歓待し、彼らに教義を伝え、さらに帰ったらミオウ族同胞に昭通へ来て入信することを勧めるよう頼んだ。その後、ミオウ族は一団また一団とやってきた。彼らは

穀物袋を背負い、山を越え、川を渡り、昭通の循道公会へやってきた。昭通の教会で、ポラードは彼らに水と煮炊きの火、寝る場所を用意し、そしてキリスト教の教義を授けたのである。雲南・貴州の多くのミオウ族が1904年（辰の年）にキリスト教に改宗した。彼らはこの歴史的事象を「龍年得道（辰の年に道を得る）」と称した[12]。

清朝乾隆皇帝の時、戦乱と飢饉のために多くのミオウ族は雲南に逃れてきた。雲南に逃れて来る前には、既にほかの民族（漢民族、イ族など）は肥えている土地を占領していた。ミオウ族は長年にわたって培った素直に受けて忍ぶ民族性のゆえ、交通不便で辺鄙な山岳地域に住むしかなかった。このように厳しい生活環境のもと、ミオウ族は平地農耕の生産方式から山地農耕物の栽培に変更したため、漢民族やイ族などと比べて、経済発展は非常に遅れてしまった。ミオウ族はほとんどが小作農であり、地元の土司に年貢を納め、生活水準はまわりの他の民族より低かった。そのほかに、ミオウ族は外部の他民族と接触したり、交流することもほとんどなかったし、長い間、他民族（特に漢民族の支配階級や周囲のイ族土司・地主）より圧迫され、基本的な人身の自由と権利さえも保障されていなかった。その問題に鑑みて、ポラードは西洋の宣教師の身分をいかし、現地漢民族の官吏やイ族土司に迫害をやめるように働きかけると同時に、今までの活動拠点昭通からミオウ族居住区石門坎に移し、そこに教会を建設し、直接住民の安全を保護し、漢民族の支配階級や周囲のイ族土司・地主より横領された財産を取り戻し、ミオウ族に返した。すなわち、ポラードはイギリス人であり、天津条約（1858年）により、キリスト教布教の自由が認められ、宣教師の保護が義務づけられており、地方官吏は彼を守らなければならなかったので、ポラードが現地に乗り込んで宣教活動した方がはるかに、帰依したミオウ族を守りやすかったのである。ミオウ族に宣教の勢力を拡大するため、ポラードは漢民族の服装からミオウ族の民族服装に改め、周りのミオウ族の知識人からミオウ族の言葉を熱心に勉強した。

多くのミオウ族の改宗者が現れた中、ポラードはイ族伝道の挫折の影から離れ、この辺鄙な場所に生活するミオウ族こそ、自分の宣教理想を達成する最もよい対象であると理解した。彼は積極的に英国循道公会本部に宣教レポートを送り、ミオウ族に対する宣教の重要さや宣教効果を訴えながら、更なる支援を求めた。ポ

[12] 原誠「中国・雲南省のプロテスタント・キリスト教についての一考察」『基督教研究』第67巻第１号、同志社大学神学部、2005年、82-84頁参照。

ラードの熱い思いや英国循道公会本部の多大な理解と金銭支援によって、ポラードは英国教育式の塾「中西学堂」開設した経験を生かし、最初のミオウ族学校を建てた。彼はミオウ族の伝統的な観念を破り、男女共学の学校を設立し、ミオウ族に文字や聖書の知識を普及した。もともとミオウ族は固有の文字を持たず、歴史・神話・伝説・習慣や規則、日常の知識は口頭で伝えられてきた[13]。ポラードはミオウ族に対する宣教活動を深めていくため、他の宣教師、漢民族とミオウ族の知識人と共にミオウ族の文字（ポラード式）を創り、聖書やミオウ族の口伝の歴史・神話・伝説などを文字化した。ポラードはミオウ族の住民に「勉強して字を覚え、教養が身についたら、他民族からばかにされない」という理念を教え、多くのミオウ族の若者に入学するように勧めた。ポラードがミオウ族社会に展開していた学校教育によって、ミオウ族全体の非識字者の数が少なくなり、自身の文化の遅れによる他民族からの差別から抜け出した。

ポラードの宣教によって、社会から見捨てられていたようなミオウ族は、キリスト教こそが民族の救いと希望であると理解した。ミオウ族の口伝の神話・伝説には創世神話、始祖神話（十二の卵と人間の誕生）、洪水神話（人間の社会の生成）が含まれているが[14]、ミオウ族はノアの箱舟など聖書の話を自分の民族の神話にこじつけ、自分の民族は古来のユダヤ民族であることや、キリスト教が先祖の信仰であると認識した。ミオウ族にとって、ポラードは旧約聖書の中のモーセであり、神がポラードを遣わし、彼を通してミオウ族の元来の姿、すなわち秦、漢の豊かで強かった時代が再現されると信じた。

非情な搾取がもたらした経済基盤の脆弱性に加えて、強烈な鬼神観念に基づく自然崇拝、祖先崇拝などの祭祀活動で神や祖先に献げる生贄として、子牛や羊など家畜を大量に屠殺したり、祭祀活動期間中の大量飲酒の習慣によって、ミオウ族の経済はさらに深刻な影響を受けた。毎年の祭祀活動に莫大な財力をつぎ込み、巨額な借金を背負い、家計を破たんさせる例が後を絶たなかった。そのため、ミオウ族の富の蓄積は非常に遅れ、生活が一層貧困になっていた。ポラードはキリスト教に入信したミオウ族に対して、伝統的な祭祀活動や、生贄にされた子牛や羊などの家畜の供養を徹底的に禁止した。ポラードの助けによって、ミオウ族の

---

[13] 鈴木正崇「ミャオ族の神話と現代－貴州省黔東南を中心に」『東アジアにおける宗教文化の再構築』、風響教社、2010年、147-148頁。

[14] 同上、155-157頁。

物質的な生活状況は改善された[15]。

更に、ポラードは以前昭通でイ族への宣教の苦い経験と教訓を汲み取り、ミオウ族の住民の安全を保護するため、度々周囲のイ族土司と交渉の機会を利用して、イ族土司たちに向けて、積極的に宣教活動を展開した。彼の努力によって、何人かの土司たちがキリスト教に入信し、その土司たちの管轄した地域のイ族住民には集団改宗の現象も現われた[16]。

当時、福音は宣教師がまだ足を踏み入れたことのない地域を、ミオウ族やイ族の手で、野火のように広がりつつあった。それは、ポラードすら、予想もしなかったほどの勢いで広がっていた。

しかしイ族とミオウ族におけるポラードの宣教活動はすべて順調ではなかった。1907年４月ポラードの教会が石門坎付近の地主武装勢力から襲われた事件が発生した。幸い、ポラードは外出していたため、難に巻き込まれることはなかった。この事件は、故郷の英国循道公会を震撼させ、ポラードは翌年４月、報告と休暇のため、英国へ帰国した。ポラードが、宣教に伴う危険を顧みず、再び石門坎に戻って来たのは、1910年１月であった。その後、彼は天然痘の蔓延と闘い、各地に教会や学校を建て、骨身を惜しまず活動を続けた。1915年教会学校の子供たちが次々に感染し、ついにはポラードがミオウ族の病人を看病する時、自身もチフスに感染し、同年９月15日石門坎教会で51歳の生涯を閉じた。出棺の当日、ミオウ族、イ族、漢民族の会葬者は1500人に達した。現在雲南地域において、ポラードが「ミオウ族の王」や「ユーロッパの大宣教師」と褒め称えられた。

三、内地会所属宣教師ポーデスの伝道活動

雲南省禄勧県のイ族地区の伝道活動に成功したのは、内地会所属のオーストラリア人宣教師ポーデスである。禄勧県のイ族地域において、キリスト教の伝来はほかの地域より少し遅れていた。

ポーデス宣教師は、スコットランドからの移民である両親のもと、1874年１月

---

[15] 徐亦猛「中国の少数民族におけるキリスト教の受容に関する研究―雲南省禄勧県のミオウ族（ミャオ族）を中心に」、『紀要』第46号、明治学院大学キリスト教研究所、2014年、190-191頁参照。

[16] 邓章应「伯格理文字的创制与传播」，西南大学文献研究所，2009年，７頁。Grist, ibid, p.147.

オーストラリアのビクトリア省のカングウハム（Carngham）に生まれた。ポーデスは青年時代に医学の勉強した後、神の召命を受けて、メルボルン郊外のリホボス神学校（Rehoboth Missionary College）へ進学し、宣教師としての専門訓練を受けた。神学校卒業後、彼は内地会によるオーストラリア国内で中国へ派遣する宣教師の募集を見て、内地会の宣教活動に共感し、応募して、見事に選ばれた。1904年 9 月にポーデスは内地会の宣教師として、オーストラリアのメルボルンから船で中国に出発した。出発する直前、内地会オーストラリア支部はメルボルン市内のバプテスト教会を借りて、中国へ派遣する宣教師たちのための壮行会を開いた。壮行会において、ポーデスは中国への宣教活動に携わることについて、固い決心を表明した。彼は「私は宣教師として中国へ行くことを決心した三つの理由がある。まず、主イエスは天でも地でも、すべての権限を彼の弟子たちに与えられているゆえ、私はしっかりとその権限を受け止め、これこそ、私の宣教の力の源のである。第二、私は主イエスの命令を信じ、認める。主はすべての弟子たちに『あなた方は行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい』と宣教の命令を与えた。私たちキリスト者はこの命令に従う責任がある。第三、私は『わたしは世の終わりまで、いつもあなた方とともにいる』という主イエスの約束を信じる。主が私とともにいるので、私は主のために恐れず中国へ行くことを決心した。この三つの理由は、人々に対する私が中国宣教へ赴く説明である。海外宣教についての理解が欠けている多くの人々は、若い男女は異教徒の国へ行くことを見て、なぜ自分の人生、才能を浪費するのか。もっと自分の祖国のために青春と才能を使うべきである。なぜ人生のすべてを不確かな国やその国民のために犠牲にするのかと厳しく批判した。しかし、それは不確かなものではない。私たちは確かに主から世のすべてに勝るご褒美をもらえる。私たちが中国へ赴くのは、主イエスから命じられたからであり、主イエスから求められた行動であり、異教徒たちが私たちを必要としているのである。私は主イエス・キリストの教えに忠実に従わなければならない」と述べた[17]。

ポーデスは中国の広州に到着した時、内地会イギリス宣教師アデーム及び英国循道公会宣教師ポラードはすでに雲南、貴州のミオウ族地域において、宣教活動は大成功していた。雲南地域の宣教師仲間を支援するため、1906年ポーデスは内

[17] *China's Millions* (Australian Edition), The China Inland Mission, October, 1904, p117.

地会によって、武定県撒普山のミオウ族地域に派遣された。1908年ポーデスはイギリス出身の女性宣教師ピアソン（Minnier　Pearson）と結婚し、共にミオウ族のために宣教に励んだ。ボーデス夫妻は内地会の宣教方針に従い、現地の文化と言葉を非常に重視した。彼らは漢民族の服装からミオウ族の民族服装に改め、周りのミオウ族の知識人にミオウ族の言葉を熱心に勉強した。約10年間の宣教努力の末、武定県撒普山のミオウ族地域にある程度の固い宣教基盤を築いた。教会のミオウ族のキリスト者の勧めによって、ポーデス夫妻はイ族を宣教の射程に入れた。1916年ポーデス夫婦が武定県撒普山から禄勧県撒老烏のイ族地区に宣教にきた。ポーデス夫妻は医療と教育などの宣教活動を通して、イ族地区のキリスト教基盤を固めるために働いた。当時、この地区に住むイ族は貧しく病人も多かったので、ポーデス夫妻は、自身の医学知識及びオーストラリアから持ってきた医療器材を活かし、病人の治療を行いながら伝道に努め、イ族の信頼を得た[18]。彼の病人の中には、大きな影響力をもっていたイ族の宗教指導者ピモと土司もいた。ポーデス夫妻の導きによって、ピモと土司はキリスト教へ改宗し、彼らの多くの追従者もキリスト教へ改宗し、大きな集団改宗運動の波が禄勧県のイ族地区において広がっていた。このように、ポーデス夫妻によって提供された医療活動はイ族への宣教のために大きな役割を果たした。西洋の医学や薬は、現地の潜在的改宗者に、人間のコントロールを超えた病や自然環境によりよく対処する方法を提供すると同時に、イ族の伝統的な宗教実践がキリスト教に比べて効果的でないことを示したと考えられる。

多くのイ族の改宗者が現れた中、ポーデス夫妻はこの辺鄙な場所に生活するイ族こそ、ミオウ族に続いて、自分の宣教理想を達成する最もよい対象であると理解し、積極的にイ族のための教会を建てた。ポーデス夫妻は禄勧県の撒老烏でイ族撒老烏総教会を成立し、禄勧県下の各地に合計52の支部教会を建てて、イ族の中にキリスト者を増やした。ポーデス夫妻はイ族に聖書の知識を普及させるため、英国循道公会宣教師ポラードにおけるミオウ族への宣教方法を倣い、撒老烏総教会をはじめ、支部教会まで小学校を建てた。一時的に小学校の在籍生徒数は500人を数えるに至ったが、経済困難のため1925年には大半閉校を余儀なくされた[19]。

---

[18] Lachlan Strahan *Australia's China: Changing Perceptions from the 1930s to the 1990s*. p. 111.

[19] 雲南編集組編、「禄勧県訪問資料」、『中央訪問団第二分団　雲南民族情況汇集 上』、雲南民族出版社、1986年、56-57頁。

キリスト教の土着化の観点を絡み合って、ポーデス夫妻は、これからのイ族地域において、イ族のキリスト者が宣教師に代わり自分の同胞に宣教することに備え、神学校を設立する必要があると実感した。ポーデス夫妻は、内地会本部及び他教派の宣教団体に宣教レポートを送り、イ族に対する宣教の重要性や宣教効果を訴えながら、経済支援を求めた。ポーデス夫妻の熱い思いや色んな教派からの理解と金銭支援によって、1944年撒老烏でイ族をはじめとする六つの民族の連合により西南神学校が設立された。この神学校は専門的に少数民族のために現地の伝道者を養成することに力を入れた。

もともとイ族は固有の文字があったが、歴史・神話・伝説・習慣や規則、日常の知識の多くは伝統的な宗教教職者ピモ（毕摩）のみ精通して、一般のイ族は全く文字を読めない状態にあった。ポーデスはミオウ族のキリスト者の助けを得て、ポラードが創ったミオウ族の文字（ポラード式）をベースにして、イ族語のローマ字表記法を考案した。その後この表記法はほかの宣教師たちによる修正を経て、ポーデス式のイ族文字として確立された。ポーデスはポーデス式のイ族文字を用いて、新約聖書や讃美歌をイ族語で翻訳し、印刷してイ族のキリスト者に配った[20]。このように、ポーデス夫妻はイ族に向けて、ポーデス式のイ族文字に基づき、教育と識字活動を行い、イ族キリスト者の質の向上に努めた。

イ族の神話・伝説には天地を創造した最高神や霊魂不滅が含まれているが、実際に聖書の教えと似ている。ポーデス夫妻はイ族に聖書の話を自分の民族の神話として解釈し、キリスト教が先祖の信仰であると認識させた。そのため、イ族のキリスト者にとって、キリスト教は民族の救いと希望であり、しばしば自らを旧約聖書のイスラエルの民になぞらえ、亡国、離散、放浪、漢民族の支配による民族の苦難を語る。イ族のキリスト者はこの普遍宗教であるキリスト教の様々な教えの中でも、漢民族から政治と経済の抑圧された少数民族としての自らの苦難の歴史に説明や救済の可能性を与えてくれるような要素に対し、特に関心を抱き、それらを好んで取り上げている。

1944年、教会の信徒たちの間にチフスが蔓延し、ポーデスはポラードと同じように現地の病人を看病する時、自身も感染し、同年11月10日撒老烏教会で70歳の生涯を閉じ、撒老烏総教会の傍の墓地に埋葬された。

---

[20] Joakim Enwall, *A Myth become Reality: History and Development of the Miao written language*. Institute of Oriental Languages (Stockholm University, 1995) p. 241.

結論

以上の考察を通して、中国少数民族における西洋伝道会の活動の歴史的背景について、主に以下の二点を明らかにした。

第一に、少数民族における自身の歴史的側面が注目される。20世紀初期において、少数民族であるイ族とミオウ族は平地の漢民族からの政治と経済の抑圧に苦しんでいた。その時英国循道公会及び中国内地会に所属した宣教師が雲南省の少数民族の間で宣教活動を始めたことが集団改宗運動を引き起こす歴史的背景となった。イ族、ミオウ族にとって、キリスト教は抑圧された少数民族としての自分の苦難の経験に対して説明と救済の可能性を与えると認識した。

第二に、西洋伝道会の宣教師の働きの展開である。西洋伝道会の宣教師は、伝道（教会の設立）、医療（診療所の設立）、教育（学校の設立）などの分野における様々な文明活動を通して、少数民族社会の精神生活と物質生活を改善させ、少数民族の間に確固とした基盤を作り上げた。ポラードとポーデスが所属の西洋伝道会は異なるが、中国に渡来する目的は同じである。すなわち、一つの民族を導き、信仰を持たせることである。結果として、彼らは自分の念願を達成した。ポラードとポーデスは中国の少数民族地域において、ミオウ族、イ族との出会いによって、彼らはすぐにこの地域を第二の故郷として選び、この国、この地域、この民族に自分のすべての愛と心血を注いだ。ポラードとポーデスは従来の対立や孤立で活動していた西洋伝道会の宣教方法を切り捨て、現地の民衆と協力関係を築く宣教方法を採った。彼らは有効的な宣教活動を展開するため、積極的にミオウ族、イ族の言葉と文化、伝統を習い、彼らと一緒に生活し、最後には自分の命さえも惜しまず、イ族とミオウ族のため、宣教事業のために差し出した。ポラードとポーデスのような西洋伝道会の宣教師たちは自分自身の人格的な魅力や献身的な行動によって、イ族とミオウ族社会において、大きな共感を得、多くの改宗者を獲得できたと評価できる。